でもその晩，学習が終わった後，先生を囲んでのコンパは，仕事をしたあとの解放とでもいうかとても楽しい思い出。

２日目の早朝に，森林公園の中にある新しく発見された溶岩トンネルを，地理学科の巡検というので特別に許可をいただいて調査した。かがんで入るような小さな溶岩トンネルだったが，まだ人に踏み荒らされていないので，豆学者になったつもりで皆熱心に調査。その日は富士山麓を西回りに南下して，白糸の滝まで行った。途中，富士風穴・本栖湖・養鱒場・わさび田に立ち寄り，この日の収穫は大きかった。

私は富士の水理を調べていたので，富士五湖や浅間神社の湧玉池・白糸の滝等のように湧水となってこんこんとあふれ出すところを見ると，なんともいえぬ大きな気持ちになった。この巨大な貯水地富士山。

３日目。今回の巡検の山場，白糸の滝における微気候観測だ。アスマンの通風温度計片手に，私達は持ち場に散らばって，さっそく観測開始。あいにく日曜日と重なり観光客で混み合ってやりにくかった。発煙筒をたいて滝つぼの中における空気の流れを観測した。観測結果も理論づけられたのでとても嬉しかった。

午後最後の目的地，田子の浦港に向かった。富士宮から歩くこと１時間半，潤井川の河口での鼻と目をつき刺すような刺激臭は想像以上のものだった。１４キロメートル上流では鱒も泳いでいた清流が，海に行きつくころの姿には情けなくなった。それと同時に平気で汚す人間に怒りを感じた。そこにいる限界を感じ«死の町»を早々に退散。富士のきれいな空気にホッとする思いであった。

このようにして重いリュックをしょっての巡検は無事終わった。心残りだったのは，この巡検に富士が一度も顔を見せてくれなかったことだ。富士山麓にいながら，それを実感として味わえず，うらめしげに磁石片手にそこにあるであろう富士山を見上げたのを覚えている。

１２月に入った今，真白な雪をいただいて遠くに浮かぶ富士は，巡検前よりも私に身近なものとなっている。

（１年　石川文子）

天竜川流域巡検　（浅海先生）

昭和４６年１０月１８日～２０日

第１日　６：５０新宿発アルプス１号に乗る。１０：３５岡谷着。くもり空が途中から晴れてきた。

桂川段丘地形，茅ケ岳・八ケ岳などの火山地形，韮崎火砕岩流を車窓観察する。この火砕流の上を中央線が走っているということだ。岡谷の駅をおりてまず釜口水門へ。ここでは諏訪湖の水を調節して天竜川に流している。諏訪湖では，１０年ぐらい前から藍藻類の一種であるmicro－cystis が発生してきた。特に，夏繁殖するので湖面は緑色になる。この現象は諏訪湖周辺の醸造工場から流される廃棄物，めっき工場からの金属イオン，また，湖に繁茂する底生植物が腐敗することなどの原因による。巡検前にスライドでその汚染のようすを見たが，いざこの目で見てみると驚きも新たになった。今のところ水門を調節してプランクトンを天竜川に流しているが，その他の対策はないものだろうか。

水門から対岸を遠望する。諏訪湖は霧ケ峰溶岩台地が陥没してできたもので，フォッサマグナの西縁にあたる。南岸にケルンコル，ケルンバット地形がみられ，東岸には溶岩台地がのびている。花岡城趾の近くでは鉄平石のある露頭を見た。

天竜峡に着いたのは夕方だった。露頭で花崗岩基盤と段丘礫層を見る。夕焼け空にそびえる山々のシルエットがくっきりと美しかった。

第２日　この日も晴天である。天竜川にかかっている弁天橋で，両岸の段丘をながめながら講義をきく。この地方では天竜川の東を竜東，西を竜西と呼んでいる。竜西では花崗岩基盤の上に田切層とローム層がのっている。竜東では基盤岩石の上に机山層がのる。竜東にある露頭で机山層を見た。比較的粒のそろった礫で供給源は赤石，伊那山脈ということである。

下市田にある長野県農業試験場下伊那分場を見学する。ここでは，米の減反対策として茶の栽培に力を入れている。“やぶきた”という寒さに強い品種をとり入れているということだった。また，米の比率を下げ，畜産・園芸の比率を高めるのを目標としている。果樹としては，ナシ・リンゴ・モモ・カキ（干し柿用）などが栽培されているが，ナシの場合労力をかけて出荷するわりには，世の中に伊那梨という名前があまり知られていず，鳥取の２０世紀梨にまけてしまう。現在，新しい品種（新水・幸水）に変えるようにしているということだった。また，この地域では特用作物としてこんにゃく栽培もさかんである。

第３日　駒ケ根高原からバスでしらび平へ。紅葉が美しい。この日も快晴。今回の巡検は天候にめぐまれよかったと思う。しらび平は標高1,６００ｍのところにあり，さすがに寒かった。ここから千畳敷まで約1,０００ｍを７分でつくロープウェイにのる。眼下には急斜面が広がり，遷急点をもつ滝が流れている。下りのロープウェイとすれちがったかと思うと，それはすぐに眼界からはなれてしまう。これが毎秒２ｍというものなのか。高山病になるのではないかという恐れもなんのその，雲海にそびえたつ山々，特に富士山の白い姿を見て感激してしまった。晴れていても

空気はやはり冷たい。千畳敷カールは日本の永河地形のうちでは中規模のものだという。このカールの中に断層が走っている。ここから山の斜面を登る。花崗岩がごろごろしているし，かなりの急斜面である。ところどころに雪が残っている。御岳は雲をかぶってその頭を見せなかったが，この巡検の３日間晴天にめぐまれ，最後の日には，日本アルプスの連山を仰ぐことができた。足にマメができたけれど，思い出に残る巡検だったと思う。　（２年　三　浦　千代子）

東北北部巡検　（正井先生）

昭和４６年３月１０日～１２日

２年生の春休みに春まだ浅い東北地方への巡検が，正井先生の御指導のもとに行なわれた。調査項目は都市調査（都市景観，都市分布）村落調査（農村・漁村）地名調査，レクリェーション調査等であった。

３月１１日午後１時３８分に平泉駅に集合した。春３月とはいってもまだ雪の残る風景であった。この日は中尊寺を見学しただけにとどまった。その昔藤原秀衡の作った平泉の町のおもかげはこの中尊寺に残っているにすぎない。町の中心もその当時とはまるで異ったものになっている。

１２日は平泉の町の調査を行なった。都市景観を見るために商店の種類と戸の開閉状態について，旅館から平泉の駅まで調査した。平泉を出発して盛岡経由で宮古へ向う予定であったが予定を変更して花巻経由で宮古へ向った。大部分の人は花巻経由であったが2，３人の人は盛岡経由で行き宮古でおちあうこととなった。花巻・陸中山田で下車して町の調査を行なったが，あいにく小雪がちらちらまう寒い日であった。山田線の車窓から見えるはずの三陸海岸も雪の中にけむってしまってはっきり見えなかったのは残念であった。宮古へ着いたのはもう夕方すぎであった。１日降っていた雪もようやくあがっていた。

巡検最後の日は宮古の町の調査を行なったのち宮古より約１０Kmほど北にある田老へ向った。田老は昭和８年の昭和三陸津波で死者が１０００人をこえる大きな被害を受けたが，その後，高さ８ｍの防潮堤が作られ，昭和３５年のチリ地震津波には被害を受けずにすんだ。防潮堤に守られた町は再開発され大きな道路が走り，新しい家がたち並んでいた。この田老の調査で東北巡検の日程を終わり，予定より早く昼すぎに解散になった。この後東北の春を楽しむ人，スキーへ行く人，帰京する人；とそれぞれ別れてこの楽しかった巡検の幕をとじた。　（３年　松　下　恭　子）